

近世の幼学書一つ

——『世話早学文』について——

乾 善 彦

はじめに

ここに紹介する『世話早学文』は、歌によって漢字・漢語を修得するのを目的とした、いわゆる幼学書の一つである。歌を利用した点で『小野篁歌字尽』にかような点があり、本書が『小野篁歌字尽』に影響を受けていることは、中に三項目だけが、漢字を解字していることで支持されよう。ただし、『小野篁歌字尽』が漢字を分解して類を集め、これによって漢字の形を覚えさせようとしたのに対して、こちらは歌によって漢字の音訓を覚え、また、漢字の真行草の形も覚えることができるよう工夫がなされている点で、基本的な目的は異なる。また、『小野篁歌字尽』は、近世を通じてさまざまのかたちで広く流布しており、これによって、当時の人々の漢字の形に対する認識を知ることができるのに対し、本書は南紀又は泉南の地方出版であり、それほど流布した形跡が見当たらない。したがって、前者が近世の漢字意識について、比較的一般化できるのに対して、後者はこれを当時の一般的な認識とはしがたい面がある。

本稿が、あえて本書を紹介するにいたったのは、これが、『小野

篁歌字尽』の影響下に成立したものであることが、大きな理由であるが、これが、時代的にも地域的にも限られたものであることが、『小野篁歌字尽』とはまた違った意味で近世の漢字意識、文字生活の一端をうかがいしることのできる資料として注意されると判断したからである。

本書の全貌については、帝塚山学院大学研究論集第二十九集（一九九四・十二）に全文の翻刻と若干の図版を掲げた。あわせて参照いただきたい。以下に用いる項目、見出し語の番号はそれに付したものである。

一、『世話早学文』の概略

『世話早学文』は、架蔵本によると文政元（一八一〇）年南紀優雅堂松下軒から板行されている。小本（縦一七・九横一一・九）で、序の一丁に次いで鎌洲の題賛から第一丁が始まり、第二丁目から第四二丁までが本文、終丁として畔柳氏の跋文と刊記がある。全四四丁（翻刻篇図版参照）。序跋は次の通りである。

夫惟、古より聖賢の教数多にして、いづれのおしへも乏（とぼ

しからざるに、爰に南泉の松下氏、童蒙の聞煩(わづら)ふ言(ことば)のかたちを聞やすくせんと、今新に國字(かな)につらねて世話早学文(あらはす)著(あ)る。余、是を閱(けみ)するに、即真行艸(まことまこと)の三昧(さんまい)をする。その言の音訓を重たるに因て既に其語の心を知り、亦夫に由て字毎の假名(かな)かはる故に其字の音訓を知る。猶傍(かたはら)に聞文盲(もんぶんもう)の人も、その訓音(よみこゑ)を聞て其意をしらんか。余、其名の誣(しる)ざるを好じて、禿筆(かぶら)を揉てその趣を書す而已(す)。

攝州尼崎住 木々堂述

(序一オ〜一ウ)

新著為便郵學童、忝翁十歲苦心功、試看日用尋常字、一捷徑開一卷中。

縑洲題

(序二オ)

文政元戊寅九月下旬／泉南 松下姓 著／讚陽 三木保治 校

(序二ウ)

此書、正而俚俚而正、以取便焉、非箕弓裘治之比、開捷徑於童蒙者、蓋松下氏之惠也、因題書尾焉。

南紀 畔柳氏

(終丁オ)

文政元戊寅九月發行／南紀／優雅堂／松下軒／藏板

(終丁ウ)

版元、南紀優雅堂松下軒についてはいまのところ明らかにしえないが、著者の名前から個人出版のようなものではないかと推測される。和歌山の地方出版については、いくつかの報告があるが、優雅堂松下軒なる書肆は見出せない。著者松下氏についても未詳とせざるをえないが、南紀の松下氏および畔柳氏と関係があるとすると、紀州藩に化政期の文人、松下成美なる人物がある。

『紀州郷土藝術家小傳統編』に

松下東滄

松下東滄、名は成美、幾之丞と稱す、東滄は號なり、本藩の士にて大御番御代官見習役を勤め二百石を賜へり、文学を善し篤学の士なり、化政度の人とす。

とある。安政四・五年の知行帳には「大御番 海士御代官見習」とあり、下って『文久元 紀士鑑』には「奥熊野御代官」となっている。また、天保十五年の『統講習餘吟』には「松下成美 號東滄 稱幾之丞」として漢詩二首を載せる。ただし、この人物と関係があるとしても、文政元年にはまだ相当若かったと考えられる。あるいは、奥熊野御代官は二代目か。また、跋文を書いた紀州畔柳氏についても、同じく、安政四・五年の知行帳ならびに『文久元 紀士鑑』に三百石、小十人頭のち小普請支配と記される畔柳甚左衛門なる人物が考えられる。直接の間接かは別にして、これらの人物との関係は考えられよう。

ちなみに、序の賛をものした縑洲は、『浪華人物志』(文政七年)などに「阿部縑洲(儒家・篆刻)」とある浪速の住人阿部良平かと

思われる。緑洲の随筆『良山堂茶話』には、各地の文人との交友が記されており、松下氏や畔柳氏の名は見えないが、可能性は高いと言えよう。序文の摂州尼崎の住人木々堂なる人物(校者三木保治か)については、いまのところ考えるところがない。

本書の伝本は、国書総目録に不載。架蔵本のほかに、和歌山県立図書館にも一本を確認している。通俗的なものゆえまだまだ残っていると思われるが、反面、内容など勘案すると部数はそれほど多くはないとも思われる。

内容は、序文に「その言の音訓を重たるに因て既に其語の心を知り、亦夫に由て字毎の假名(かな)かはる故に其字の音訓を知る。」とあるように、基本的には見出しに、二字熟語二語を掲げ、カタカナで読み方を示す。下段には歌によって上の句と下の句とで一語ずつ、見出し語の漢字の音訓を示す。また、「即真行艸の三昧をしる」とあるように、真行艸の三書体を区別する。すなわち、見出し字は真(楷)書。上の句と下の句で一語ずつ解説するが、そのはじめが行書、後が草書。という工合である(翻刻篇図版参照)。この点は、『小野篁歌字尽』が多くは行書のみであるのと大きな差がある。

以上のような形式が基本であるが、中には(特に後半になると)これ以外の形式も見える。全項目数三三六項を、形式で見ると以下のようなものがある。

- a、二字熟語(中には三字熟語八語も)二語
 ↳最も普通の形式(二七三項目)
- b、二字語二つで四字熟語(三項目、ただし数え方によって七

項目を追加できる)

204, 205, 207 (9, 39, 192, 196, 197, 202 ~ 203, 218)

c、一字語二語(二三項目)

同字異訓 304 ~ 325 (全一八項目)

同訓異字 295

その他 128(類義語)、296(類音訓)、301(類義語)、318(同音)

d、一字語二つで二字熟語(一八項目)

198, 199, 202, 203, 248, 282, 286 ~ 291, 302, 303, 314, 324 ~ 326

e、二字熟語と一字語(九項目)

27, 210 ~ 215, 292, 297

さらにその中には読みが二つあるもの四項目(289 ~ 290, 295)、また『小野篁歌字尽』のような解字を含むもの三項目(215, 303, 308)が含まれている。また、見出し語の音訓についてみると、次のようになる。

音読み語(一字語四語、二字語五二四語、三字語六語、四字語三語)

訓読み語(二字語五五語、二字語三四語、三字語一語)

その他、いわゆる当て字六語 音訓複合一語(298, 151)の項目内での見出し語の選択は連想による類語が多いようだが、同じ字を含む熟語や同音語、同字異訓、さらには対語などがあり、さまざまである。これに呼応して項目の配列も連想的なものが多いようである。(これも翻刻篇を参照していただきたい。)

二、国語資料として見た『世話早学文』

1、文語的要素と口語的要素

本資料は、歌によって漢語や漢字の音訓を覚えるものであるのである意味では節用集のような性格もうかがわれる。と、同時に『小野算歌字尽』に比べると言葉遣いの面で不統一さがめだつ。端的にいうと、仮名遣いが場所によってゆれてゐる(後述)のは、初學者が学習するのに、大きな難点の一つであろう。そういった不統一を感じさせる大きな要素として、活用語の一段活用と二段活用との混用に注意してみよう。

a、一段活用と二段活用とが混用される

- (上) あぐ 38,54,55,216 あげる 9,112
(改) あらたむる 319 あらためる 146
(考) かんがふ 235 かんがへる 255
(答) こたふ 266 こたへる 19,92,177
(助) たすく 99 たすける 306
(倒) たふる 217 たふれる 218
(勤) ことむる 247 ことめる 325
(褒) ほむる 112 ほめる 110
(乱) みだるゑ 154,167 みだれる 127,163
(見) みゆる 268,293 みへる 133
(助動詞) はつかしめらる(214)

そこなはれる(141) へるしめられる(142)

b、一段活用のみ

- あらはれる(175) うそえる(84) うける(121) うったえる(115)
うめる「熟」(238) おそくる(216) おちぶれる(148) おちる
(148) かくれる(180) へこれる(181) へこせれる(279) こ
らえる(303) ちかえる(29) ちげる(49) しりぞける(112)
すすめる(201) そだてる(189) こける(132) こたへる(135)
やめる(139) つもえる(153) なてる(260) にげる(109) は
てる(253) はらだてる(209) ふせる(261) まける(315) も
だえる(37) へ下一段
こぶこる(277) はぢる(138) へ上二段

c、二段活用のみ

- うるる(107) おちむ、おちむる(113) おとろふ(88) おぼゆ
れは(223) きはむ (253) きだむ(57) たゆる(165) とち
むる(49) となふる(301) のぶる(221) はなる(316) ひゆ
る(11) ぶく(60) くだくれと(252) ゆだめ(310) へ下二段
おぢる(132) すぶる(305) みこる(125) もちゆ、もちゆる
(58,44) へ上二段

動詞の二段活用が一段化する例ははやく中世から見られるが、近世において一般化したと考えられている。ただし、場面や位相によって、両活用が混在するのが普通のものであり、たとえば、近松作品における混在については、坂梨隆三氏の詳しい調査がある。これは、文章の問題としてとらえられるべきもののものである。その点で、歌文としての混在は、注意されるところであるが、初学のものに對

するこのような資料においては、その性格からいって、統一性が求められようし、当然考えられてしかるべきであろう。本資料では一段活用と一段活用とが混在しており、複雑な様相を呈している。つまり、(a) に示した一〇語に両活用が見え、助動詞「る、らる」にも両活用が見える。また、b、c に示したように両種の活用では一段活用のものが優勢であり、筆者の日常の口語的な要素と文語的な要素とが入り交じっていると考えられよう。これは、初学に向けた教科書としては、適切なものとはいえないであろう。歌と言う制約にもかかわらず、作者の日常の言語が色濃く写し出されていると思われるのである。

次に、音便形と非音便形についてみると、これも統一的ではない。ただし、音便形では概して音便化した形の方が少なく、活用型とは逆に、文語的な要素を多く含んでいるといえようか。このうち、ウ音便については他の音便形に比べて特徴的であり、関西方言的な要素が色濃く表れているものとして注意される。

a、イ音便

- かいて(2) かきたる(6) かいたる(7) 同語のゆれ
 ありがたき、ありがたい(138) 同語のゆれ
 うじぶいて(216) じぶ(204) きたり(237)
 じゅうな(151) すべ(183) もどかし(184) 音便形
 はぶきて(123) ひきて(250)
 あつき、なぶき(13) よろしき(17)など多数 非音便形

b、促音便

- よつて(118,119) よりて(242) 同語のゆれ
 いのつて(259) 音便形
 くばりて(69) ほりて(104) まもりて(280) 非音便形

c、撥音便

- つつしんで(38,39) 音便形
 とみて(24) なやみて(279) 非音便形

d、ウ音便

- とふて(20) ちがふて(78,80,82) あふた(90) おふて(116)
 ためらふて(160) いふた(162) したふて(164) むかふて(207) まじなふて(245) たがふたる(302) あふて(316)

また、次のような「ゝなる」「ゝな」の混用も基本的には文章語でありながら、口頭語的な要素も色濃く含んでいることの表われとして、受け取ることができよう。

さかな(28) つづまやかな(46) すぐやかなる(33) なまなる(55)
 語形の面では、m音とb音とのゆれが注意される。これも、ある面では関西方言との関わりで考えるべきものかもしれないし、また、仮名遣いの問題ともいえるかもしれない。

- かたむく(87) ーかたぶく(91)
 まんべつーばんべつ(196)
 みやうゑいーへうゑ(239)
 うじぶ(12) (216) たへらぶ(235) ばいこ(262)
 おもむき(242)

2、仮名遣い

次に仮名遣いに目を移すと、仮名遣いも概して混乱している。今これを、見出しと歌文とでの語の仮名遣いについて見てみると、以下のように両様の仮名遣いの見られるのが五十七例にも達する。

項目番号	漢字表記	見出し語	歌文						
1-2	豊饒	ぶによう	ぶねう	119-1	因縁	いんえん	いさほし	いさをし	いんえん
14-2	面謁	めんえつ	めんゑつ	124-1	差畧	しやりやく	さりやく	さりやく	おんみつ
20-1	恩問	をんもん	おんもん	137-2	隠密	をんみつ	おんみつ	おんみつ	おんみつ
28-2	重疊	ちやうでう	ちやうぐ	154-1	結納	ゆいのう	ゆひのう	ゆひのう	ゆひのう
29-1	繁榮	はんえい	はんゑい	154-2	違亂	いらん	ゐらん	ゐらん	ゐらん
29-2	活計	くわつけい	くはつけい	155-2	違背	いはい	ゐはい	ゐはい	おんくわ
39-1	恐惶	きやうくわう	きはつけい	171-1	溫和	をんくは	おんくわ	おんくわ	ゆうひ
42-1	巨細	こさい	きやうくはう	171-2	優美	いうび	ゆうひ	ゆうひ	ゆうひ
44-1	以為	をものはく	きよさい	172-1	用意	ようゐ	ようい	ようい	ようい
44-2	所以	ゆえん	おもわく	173-1	忘却	ぼうきやく	ぼうきやく	ぼうきやく	ぼうきやく
45-2	趣意	しゆい	ゆゑん	174-2	賄賂	まいない	まいない	まいない	まいない
47-1	不如意	ふによい	しゆゐ	175-2	披露	ひろ	ひろ	ひろ	ひろ
56-1	増減	さうげん	ふによゐ	177-2	問答	もんだう	もんどう	もんどう	もんどう
57-2	必定	ひつでう	ぞうげん	181-1	破壊	はえ	はゑ	はゑ	はゑ
58-2	勘定	かんでう	ひつぢやう	185-2	氣跡	きうとひ	きうとひ	きうとひ	きうとひ
63-1	相撲	すまう	かんぢやう	191-2	交易	かうゑき	かうえき	かうえき	かうえき
66-1	結縁	けつえん	すまふ	192-2	應變	おうへん	おうへん	おうへん	おうへん
			けちえん	196-2	萬別	まんべつ	まんべつ	まんべつ	まんべつ

207-1	面向不背	めんこうふはい	
224-1	有職	いうしよく	めんかうふはい
239-1	苗裔	みちやうゐい	ゆうしよく
242-2	歸依	きゑ	へうゐい
245-2	怨敵	をんでき	きえ
249-2	未央	びえい	おんでき
254-2	合点	がてん	びゐい
267-1	迂闊	うくわつ	がつてん
296-1	踈	をろそか	うくはつ
296-2	嚴	をこそか	おろそか
299-1	征夷	せいゐい	おこそか
299-2	東夷	とうゐい	せいゐ
301-1	唱	となうる	とうゐ
301-2	稱スル	しやうする	となふる
315-1	眞	をう	せうする
318-1	理	をさむ	おふ
323-2	縦	ほしひまゝ	おさむ

以上を整理すると以下のようになる。

a、ア・ヤ・ワ・ハ行の仮名遣い

せーわ	44-1
らーら	45-2 47-1 154-2 155-2 299-1 299-2
らーら	172-1
らーら	154-1 174-2 185-2

ひーゐ	323-2
うーふ	63-1 301-1 315-1
えーゑ	14-2 29-1 44-2 99-2 119-1 181-1 249-2
ゑーえ	191-2 242-2
きーぢ	20-1 44-1 105-1 137-2 171-1 192-2 245-2 296-1
	296-2 315-1 318-1
ほーお	110-1
らうーゆー	171-2 224-1

b、拗音・合拗音

くわーくは	29-2 39-1 267-1
くはーくわ	171-1
こーきぢ	42-1
じやーぢ	124-1
ぢうーぢぢ	28-2 57-2 58-2
じようーねぢ	1-2
しやうーせぢ	301-2
みちうーんぢ	239-1

c、オ段長音の開合

ぢうーぞう	56-1
だうーぢう	177-2
つうーかう	79-2 207-1
ぼうーばう	173-1

d、その他

長音

しゅーしう 42-1

ひろーひろう 175-2

mーb

みやうーべう 239-1

ばんーまん^(半) 196-2

促音

がーがつ 254-2

その他

けつーけち 86-1

これらの中で、以下のような例は、仮名遣いに留まらず、語形が異なっているように見える。

拗音

42-1 巨細 (こさいーきよさい)

124-1 差畧 (しやりやくーさりやく)

mーb

239-1 苗裔 (みやうあいーべうあい)

196-2 萬別 (ばんべつーまんべつ)

促音

254-2 合点 (がてんーがつてん)

その他

86-1 結縁 (けつえんーけちえん)

次に歌文における特徴的な仮名遣いとしては、「ふ」の用法と

「ば」とが注意される。

「ふ」の仮名遣い

ほーふ

あふひで(221) とくひで(93,100) じきふで(166,209)

おふせられたる(212) たふる、たふれる(217,218)

こふーかふ いかふ(219)

「ば」の仮名遣い

おもんばかる(70,71,134) おもひはかられず(73)

また、次の例は、意味によって微妙に語形を変えていると考えるが、同語形を仮名遣いによって書き分けているものと見ることもできるかもしれない。

かゆる (変・易) (191,197)ーかへる (帰・還) (3,80,257,312)

仮名遣いも初学のものにとっては重要な学習事項であるが、それにも配慮はなされていない。このあたりにも教科書としての不適格な用件が見える。むしろ作者の日常の言語のようすを示していると考えられるのである。そしてそれは、関西方言的な要素からも首肯できよう。

3、関西方言的な要素

地方出版であることで、関西方言的な要素が指摘できるのは、本資料の大きな特徴であろう。さきに述べたウ音便はその最たるものであり、そのほかにもいくつか指摘できた。さらに、見出し語の中では、次の語が注意される。

総嫁・幻妻(12)

夜發 やほち〈和名〉○京大坂にて、そうかといふ。江戸にて、
よたかといふ。紀州にて、幻妻(げんさい)といふ。

〔物類称呼〕

そうかとは やほつのこと

げんさいとは 女のこと

〔新撰大阪詞大全〕

また、次のような語も、概ね現代では関西方言の特徴として挙げ
られるものである。

ほんま(229) おおのく(216) 相(かつこ) (133)

給(たべる) (213) うしのふ(304) へす(56,190)

江戸時代後期の関西方言の資料は非常に少ないなかで、それぞれ
の見極めは必要であるが、一つの資料としては興味深いものがある。

4、漢字使用の面から

本資料のもう一つの特徴は、「即真行艸の三昧をしる」とあるよ
うに、漢字の真行艸の三書体が示されていることである。

そもそも真行艸の三書体は古くから意識されていることではある
けれど、いわゆる往来物の多くは行書を基本としており、初学の世
界ではこれが漢字書体の基準であったと思われる。しかし、近世初
めには真草二体の和玉篇や節用集が編まれたり、また、三体千字文
や十体千字文などが数多く出版されたり、書体による「かたち」の
差は当然強く意識されていたはずである。本書ではそのあたりの漢
字の「かたち」に対するある意識をうかがうことができる。

a、楷書見出しの字体の一般的傾向

①正字体と通行字体

現行の正字体に一致するく(拜(38)、来(3,77など)、嚴(137)など
現行の常用漢字体と一致するく(豊(1)、来(31)、鎮(98)など
どちらでもないが当時の一般的な傾向に一致する

く(往(3,257)、く(72,74)、踈(133,184など)など

特徴的なもの

く(懐(37)、博(225)、減(56,190)、決(179)、訛(221)など
②項目によって字体に差がある

来(31)→来(3など)、嚴(137)→嚴(13,136)、勸(158)→勸(65
など)、奇(82)→奇(78など)、蘇(240,2)→蘇(240,1)、略(46)

→罍(124など)など

③見出しと歌とで差がある

嚴→嚴(137)、来→来(3など)、略→罍(46)、總→惣(12)など
b、真行艸によって字の「かたち」のことなるもの

①真行艸ともに異なるく(參(302)、嚴(137)、變(192)など

②真と行とで違いのあるもの

真→正、行→俗く(嚴(137)、来→来(3など)など
真→俗、行→正く(来(31)、勸(158)など

③真行と艸とで違うく(佛→仏(66)、榮→栄(29)など

c、別の字が草書では同じ形になる

・窮(145,152)と究(253)
・醉(232)と悴(233)の傍の部分

・籍(61)一籍(1011)一(行書では同じ形)

これらによって、われわれは書体と字体との関係にあらためて注意しなければならぬことを考えさせられる。当然といえば当然のことながら、近世のある時点、ある位相での、書体を通じての漢字の「かたち」(字体でも字形でも)に対する関係を実際的に窺い知ることができると、本書は興味深い資料ではないかと思う(この項については、改めて詳しく論ずることにする)。

まとめ

以上、『世話早学文』について表面的にうかがわれる特徴のあらましを述べたが、文字や語彙の面など、言及しなければならぬ事項が数多く残されている。いずれ全容を明かにした上で、残された問題については考えて行きたい。今は資料の紹介に留めておくこととする。

近世幼学書あるいは往来物の言語資料としての活用は、いまだ進んだ状態にあるとはいえない。今後、その面での進展が望まれるが、本資料もその点でさらに活用できるものと思われる。

(注)

1、拙稿『小野篁歌字尽』覚書』『帝塚山学院大学研究論集』第二六集(1991.12)

2、P. F. コーニッキー「地方出版についての試論—日本国和歌山の場合—」『一九世紀日本の情報と社会変動』(1989)、京都大学人文科学研究所、吉

田光邦編

西本三平「江戸時代の和歌山の出版者・出版書目—県立図書館蔵本について—」『南紀徳川氏研究』第二号(1987.8)

大和博幸「和歌山の出版と書肆」『近世地方出版の研究』(1993)、東京堂出版、朝倉治彦・大和博幸編

3、坂梨隆三「近松世話物における二段活用と一段活用」『国語と国文学』47-10(1970.10)

また、奥村三雄「所謂二段活用の一段化について—方言的事実から史的考察へ—」『近代語研究』2(1989.1)、武蔵野書院が、二段活用の一段化について参考となる。

4、掲出字ルビ「はん」。本書は濁点を多くつけるが、この種のものの常で、必ずしも厳密ではない。ただし、初学の教科書という点からはやはり適性に欠けよう。

(補注)

校正時に、米谷隆史氏より、刊記の異なる一本を示された。それには、榎郭がそれ以前と同じ第四十三丁目に、「泉州信達中邑／松下堂蔵板／書林京 鉛屋安兵衛／大阪 河内屋八三郎／後篇近出」とあり、終丁はない。今紹介した優雅堂本と同板であり、刷りはそれに先行する。おそらくは、最初は泉州で板となり、のち紀州に移り終丁が加えられたものと思われる。従って本稿の内容には若干変更や追加が必要となるが、それは稿を改めることにし、今は米谷氏に感謝申し上げるにとどめる。